

小規模作業所の設立と運営に関する研究（Ⅱ）

—作業所の維持・運営における支援者の“活動の原動力”とは何か—

Establishment and operation of small-scale workshops (Ⅱ)
-Motivation for the activities of supporters in maintaining
and operating workshops-

石 山 貴 章 ・ 田 中 誠
矢野川 祥 典 ・ 宇 川 浩 之
岡 田 信 吾 ・ 下 山 真 衣

小規模作業所の設立と運営に関する研究（Ⅱ）

－作業所の維持・運営における支援者の“活動の原動力”とは何か－

Establishment and operation of small-scale workshops（Ⅱ）

-Motivation for the activities of supporters in maintaining and operating workshops-

石 山 貴 章
田 中 誠
矢野川 祥 典
宇 川 浩 之
岡 田 信 吾
下 山 真 衣

ISHIYAMA Takaaki

TANAKA Makoto

YANOAWA Hironori

UKAWA Hiroyuki

OKADA Shingo

SHIMOYAMA Mae

本研究は、第1稿で、知的障害者を中心として地域に根差した活動を続けている小規模作業所「ひまわり」について、その設立に至るまでの背景と実際の活動を分析し、制度的、財政的なバックアップの少ない作業所が、どのようにして立ち上がり、維持、運営されているのかというひとつの道標を提示する試みを行ってきた。その結果、作業所設立の動機づけとして、【保護者の願い】【卒業生の行き場のなさ】【解雇・リストラの対応】【中継地点】【会社側のプレッシャー】【ヒューマニズム】【先導者の存在】が明らかとなった。今回は、その研究継続過程の位置づけでもって、作業所での活動を支えてきた支援者の「活動の原動力とは一体何なのか」を Research Question として、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を援用した分析を試みた。その結果、支援者の作業所継続に関する“活動の原動力”を構成している意識構造として【ひきよせ】【つなぎ】【ゆらぎ】【シナリオ】の4点が浮上してきた。今後も、継続したフィールドワーク調査の中から、農業福祉を中心とした障害者の働くかたちのあり方を追究していきたいと考える。

キーワード 小規模作業所 農業福祉 活動の原動力 市場価値 実践研究 M-GTA

1 問題と目的

特別支援学校卒業後の障害児者の進路確保や生活保障の問題については課題が多く、雇用促進や働く場の保障などを実現していくことに大きな壁が存在している。また、いったんは就職したにもかかわらず、様々な事情により、会社を退職、リストラされている障害児者たちも後を絶たず、再就職の道も厳しい状況下で、いかに、生活や労働を保障していくのかについての十分な検討と具体的手立てが必要とされている。

こうした状況の中、できるだけ早期に、再就職や施設、作業所などへの進路変更を目指すべく社会復帰に向けてのサポートの重要性が指摘されているが、近年、障害児者の自己実現を図っていく形態として、農業福祉に関心が集められようとしている。

これまでの福祉研究を概観すると、問題解決に向けた客観的指標を用いて議論を展開し、実践的課題を制度や政策的枠組みから切り込もうとする研究スタイルが多かった。この枠組みから一歩踏み出し、新たな実践的指標を築き上げていくことが必要とされている。

宇川・柳本・矢野川・土居・前田・田中・石山（2007）らは、実際に小規模作業所における農業福祉の実践に関して、その立ち上げから現在に至るまでの継続した支援を行っており、ここにおける農業福祉のあり方について、作業所実践の維持と継続を検討し、そこで働く利用者の生活をいかに豊かにしていくかを追究している。また、小規模作業所という機動力を生かした取り組みは欠かせないものであるとし、これを取り巻く物的・人的環境の障壁をなくするためには、支援者・利用者が共に動くことによって、地域や企業等を取り込んでいこうとする強い姿勢が必要であるとしている。

これまでの施設や作業所を含めた障害者福祉支援の現場では、各々の施設や作業所の利点、特色を打ち出しながら、福祉の枠内だけで活動をとどめることなく、地域や一般社会に対して、より主体的に関わっていく、挑戦していくことの重要性が指摘されている。福祉や教育に携わる者は、地域資源やマンパワーを最大限に生かし、創り出している製品や人間の「市場価値」を高めて、地域や社会にチャレンジしていく取り組みの必要性を求めなくてはならない。

二宮（2005）は、発達保障労働と教育・福祉労働に焦点をあて、発達の社会的保障と人間の発達を保障する労働について言及している。その役割を果たすものとして「コミュニケーション労働」を鍵概念として浮上させながら、人が物や他者に働きかけて、さまざまな製品を生み出していく営みを継続していくことにより、「物質代謝労働」と「精神代謝労働」が活性化し、人間発達の場を作り出していくと考えた。まずは、労働の場を生み出すことが必要であり、人や物がそこに集結してくるきっかけづくりが求められよう。二宮の考えるコミュニケーション労働の出発点を創り出していくことにより、そこから相互理解や信頼感、同じ目的に向かって歩む仲間意識が生まれ、最終的に、労働を通しての人間発達の促進につながっていくと考えられる。

また、障害者施設における福祉的就労を質的に捉えようとした村社（2005）は、GTA

を主な研究手法としながら、ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程（transactional process）の研究を通して、知的障害者の就労支援における交互作用分析を行っている。ここでの相互変容関係過程とは、時間的経過の中で要素の複合的な変容関係を「力動的」に説明する概念として捉えながら、これまでのソーシャルワーク研究での援助者主導の支援過程の研究ではなく、援助者と利用者の相互行為について、「人間：環境」の交互作用の全体像を、背景要因も含めて明らかにしようとした。

その結果、知的障害者授産施設の提供する就労支援サービスでは、利用者が主体的に活動する文脈として、「強さの相互確認」「社会的有用感の獲得」「自立生活意識の自覚化」の3つの文脈を提示している。そして、この3種類の文脈は、「反省的な意味解釈」「相互報酬体験」「働きながらの経営者体験」という過程を通して、利用者と援助者は「強さの相互確認」を、利用者と関係者は「社会的有能感」の獲得を、援助者と関係者は「自立生活意識の自覚化」をそれぞれ実現していくと結論づけた。

村社の研究では、「就労」の定義を広く捉えながら、一般企業における労働だけではなく、障害者授産施設や小規模作業所の活動も、「労働的活動に従事する」労働として位置づけて研究を行っており、援助者側からの枠組みではない、利用者側からの視点や姿を明らかにしようとしているところに新たな着眼点が見られる。

よって、本研究では、小規模作業所という現場で、利用者と支援者との協働活動の中で具現化される日常の実践を立脚点としながら、地域に深く根ざした農業福祉活動に取り組み、「労働確保」「労働保障」「地域資源の掘り起こしと活用」「相互関係性」を軸として活動している小規模作業所「ひまわり」の継続支援に関する支援者の“活動の原動力”に関する問題意識の構造およびモデル構築におけるプロセスを明らかにしていく。

石山（2008）の先行研究における作業所の設立と維持に関する継続研究として位置づけつつ、今回の研究では、さらなるデータの蓄積と分析を試み、作業所の維持・運営に関する問題を掘り起こすことを通して、社会性の強い、そして人と物との「市場価値」を見据えた試みを行う小規模作業所の存在意義を捉えていくことと、障害者が自己実現を図るために必要とされる実践を理論化するための現実的可能性を見出していくため、支援者側からの視点で捉えた障害者福祉・就労に対する実践の積極的意味を明らかにしていくことを目的とした。

2 研究デザイン

本研究では、数多くある質的研究の中から、限定された範囲内での理論生成が可能であり、データに密着した分析から現場感覚に即したモデル構築を目指す Modified grounded theory approach（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ：以下 M-GTA とする）を採用した。

GTA は、アメリカの社会学者 Barney G. Glaser と Anselm L. Strauss の二人によって1960年代に考案されたものであるが、従来の GTA を、木下（1999）が、今日的意義と可能性を批判的に論じ、研究方法論として体系的に提示したものが M-GTA である。ここでは、デー

タを切片化せず、現象の大きな流れや、データの中に表現されているコンテキストの理解を重視する姿勢をとっており、さらに、コーディングに分析ワークシートを用いることにより、データと生成された概念との距離を常に一定に保ちながら、データに密着した（grounded on data）分析を目指している。

障害者福祉領域研究においては、質的研究に関するものが少なく、事例報告のレベルにとどまっており、現場の実状や課題を具現化していくために有効と考えられる M-GTA を援用することにより、ヒューマンサービス領域における様々な様相を理解することができる。また、このアプローチは、実践を重視し、生のデータに立脚した理論の生成ができることや実践的活用という視点から、分析手順の明確さと実践的活用のための理論生成が目的という「実践に活用できる研究」という立場をとることも可能となっている。

本研究でも、福祉作業所の活動を支援者の語りとその背景や文脈を重視し、時々刻々と変化、生起しているデータを意味のあるまとまりとして捉え、収集したデータに密着した形で分析を行うことにより、データから概念を生み出し、その現象や関係性を説明していく。これにより、既存の理論とデータのギャップを埋めていくための足場を作り、データの意味解釈から、現実を理解していく。

そして、現場に寄り添った参与型フィールドワークの中で、支援者と利用者の関係性をフラットな視点から捉え、相互のやりとりをダイナミクスに把握しながら、作業所という枠組み（場）に埋もれている根の部分掘り起こしていくことを目的とする。

3 方法

研究方法としては、福祉現場の複雑な文脈ややりとり、関係性を把握するための方法として、フィールドワークと参与観察法を用い、そこで得られたデータを M-GTA を用いて分析しながら、支援者の福祉実践への意味づけを理解していく。

M-GTA の要点は、データを分析テーマに照らし、対象者にとってどのような意味や意義があるのかを解釈して概念をつくり、複数の概念間の関係であるカテゴリーにまとめ、分析対象にした現象を説明するための図式化を行っていくものである。

そして、実践に応用しやすいかたちで研究結果をまとめられるように工夫され、その結果を実践現場で応用し、その有効性（fit and work）を検証することが研究の回路となっている。最終的には、研究課題に対する結果としての意味を得ることを目的としており、真実を求めるものではない。

また、研究手法として GTA を用いるためには、どの GTA を採用するかを明確に示しておく必要がある（三毛, 2003）。現在、GTA は、「オリジナル版」（Glaser&Strauss, 1967/1996）、「グレーザー版」（Graser, 1978, 1992）、「ストラウス・コービン版」（Strauss&Corbin, 1990/1999）、「修正ストラウス・コービン版」（木下, 1999, 2003）の 4 種類に分けられているが、本研究で M-GTA の研究手法を採用した理由は、1）データ収集と分析の手順が明確である、2）

実践的活用を明確に意図している、3) 人間対人間の相互作用を明らかにするための限定的な研究領域に適している、4) 他の質的研究アプローチよりも説明力に優れている仮説生成型研究法であり、新しい概念や理論の構築を目的としていることにある。

上記研究方法によって、現場で生じている「出来事」「文脈」「関係性」を重視し、結果の普遍化を図るよりも、より、状況限定的な具体的問題を重視することが可能となり、福祉実践への意味づけを再解釈し、現場に根差した実践支援のあり方を追究することが可能になると考えている。なお、本研究の妥当性を高めるために、1) 研究協力者である支援者に対して、生成された概念やカテゴリに関するチェックを定期的に行う、2) 分析にあたり共同研究者に結果を提示しながらアドバイスをいただく、3) 最終的な結果に対して、支援者を交えた最終確認を実施した。

また、研究協力者に対する守秘義務に関しては十分に配慮し、個人に関するデータについては、逐語録のデジタル化段階で仮名表記にした。また、個人情報を含む内容のものについては、個人が特定されないよう、データの本質に影響を与えないレベルで改変している。

1) 調査協力者

本研究協力者を作業所設立当初から関わっている支援者7名に絞り込んだ。研究者も様々な活動に参加し、支援者とともに活動する中から得られたデータを逐語録としてまとめあげ、さらに、データの補足や理論的サンプリングを行った。

2) 調査手続き

今回の調査では、実際の支援を兼ねながらの参与観察を行い、ここで得られたデータを分析対象として用いた。形式的なインタビューだけでは捉えきれない、現場の雰囲気や状況、利用者と周りの支援者との関係、障害者本人の具体的な様子などを把握するにあたって、貴重な資料や情報を得ることができた。なお、参与観察のタイプは、アメリカの社会学者ビューフォード・ジュンカーとレイモンド・ゴールドが提唱している、調査者役割の4分類を参考としながら、この中から「観察者としての参加者」という立場でもって現場に入った。これは、研究協力者は調査目的を知っており、現場内での準メンバーとしての役割を行いながら観察を行うものである。

3) データ管理

M-GTAの研究手法では、膨大な量のデータを扱うことになるため、フィールド調査で収集されたフィールドノートについては、収集したら、出来る限り速やかにデジタル（コンピュータファイル）形式に変換してきた。録音したデータについても、ありのままを重視しながら、文章化できない「不適切な表現」についてのみ削除してきた。これまでに記録しておいたフィールドメモや映像記録などについては、全体に目を通しながら、本研究の目的に生かされる、参考となる資料を研究者2名によって選定しつつ、デジタル化を行ってきた。

4) 観察方法

研究者は、観察者と参加者の両方の役割を担いつつ、参与観察法によるデータ収集と状況

把握を行った。参与観察に関して、佐藤（2002）は、「対象者と生活をともにし、五感を通してみずからの体験を分析や記述の基礎におく調査法」として位置づけており、本研究においても、障害者とともに働きながら、周りの状況を感じ取っていくことを行ってきた。

この参与観察法により、インタビューだけでは捉えきれない雰囲気やニュアンス、言外の意を把握することができ、障害者本人が置かれている状況を感じ取ったり、本人の気持ちなども併せて聞き取ることができた。また、支援者たちが福祉就労の問題に対して、何を言わんとしているかは、共に働く中でこそ感じ取ることができるように考えられた。

5) 記録方法

参与観察やその他の状況に関わった場面において収集したナラティブ・データとともに、作業現場における雰囲気や状況、調査協力者の様子などをメモに書き留めていった。今回の研究では、実際に働いている障害者の作業ポジションや周りとの関わりなども出来る限り記入するとともに、事実とその背景にある意味について解釈を行った。このメモを土台としてフィールドノーツを作成した。これは、本質的で理論的な直観や発想、洞察、所見を記録するために用いたものであり、研究の背景を捉える目的を兼ねて使用した。

6) 分析の手順

(1) 逐語録の作成

フィールドノーツを基にしながら逐語録を作成していった。聞き取りや対話が終わると同時に、この作業を随時行ってきた。なお、逐語録は、相手と自分が話した箇所を区別したり、抑揚や沈黙、笑いや怒りの表現なども可能な限り記述した。また、方言や独特の言い回しも出来る限りそのままとした。

(2) 分析の流れ

データ分析の流れは、修正版 M-GTA の手順に従いながら、以下のような手順により行った。

①逐語録の作成



②オープン・コーディング

さまざまな概念の生成。データから可能な限りあらゆる解釈を「論理的」に検討し、それらをコード化していく（オープン化）



③分析ワークシートの作成

M-GTA では、概念生成を「分析ワークシート」で行っていく。「分析ワークシート」は、①分析のためのテーマに照らして「概念の命名」をする、②概念ができた段階で「定義」も記述する、③「具体例」「理論的メモ」を記入するという順序で作成される



④概念・サブ・カテゴリーの生成

実際のデータを分析テーマに照らし、対象者にとっての意味を解釈し概念を生成する。解

釈や概念生成をする時の原則は、対象者の立場で意味を解釈する概念間に関連づけ、分析対象とした現象を理解する結果にまとめていくデータを解釈したり、概念およびサブ・カテゴリーを生成する時は、調査対象者の立場で意味を解釈する（grounded on data）ことを心がけた



⑤ カテゴリーの生成－選択的コーディング

ある一つのカテゴリーの中にある、たくさんの個々の事象を包括する概念のコアになるカテゴリーを中心にして分析結果全体の論理的体系化を進める（収束化）



⑥ ストーリーラインの作成

分析結果を生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化していく



⑦ 結果図の作成

カテゴリー間の関係に関する解釈の妥当性を比較していきながら、カテゴリーの破棄、修正、変換を適宜行い、最終的に4カテゴリーを中心とした結果図（暫定図）を作成していく

（3）分析ワークシート

M-GTAでは、概念生成を分析ワークシートと呼ぶ書式を使って完成させていく。したがって、概念の数だけ、このワークシートができるかたちとなり、オープン・コーディングの結果は、分析ワークシートとして具現化される。分析ワークシートの目的は、研究者の解釈を重視し、解釈ができた時点でデータ全体から離れ、解釈の比重をデータから生成した概念の方へ比重を移すことにあり、生成した概念のレベルに分析上の力点を切り替えることにある。このワークシートの完成が概念の完成を意味し、その概念に関して理論的飽和に達したと判断できる。

分析を進めていきながら、バリエーションがあまり抽出されなければ、その概念を他の概念に包含させるか、概念化を中止する。また、バリエーションが多く出てきた場合、全体を見直して、解釈内容を絞りこみながら、定義や概念名を検討していった。

Table 1 分析ワークシート 【例】 NO7 〈ささえ〉

概念名	ささえ
定義	作業所のこれからの動向や運営、維持等に向けた具体的手立てや方策を見出し、卒業生の働く場、リタイアした卒業生の受け入れの場、再チャレンジしていくためのつなぎの場としての役割を担うこと。
バリエーション (具体例)	<p>No.1 やはり一番は、学校卒業後の行き先の問題だと思う。農作業を通じた生活や労働の保障ができる場はまだ少なく、卒業生の次のステップをも視野に入れた体制でもって取り組むべき使命があるように思う。</p> <p>No.2 今まで築いてきた多くの方々のサポートが、福祉と企業を結ぶ役割を果たしている。この関係性の連鎖が広がることにより、農業福祉の意義も高まっていくだろう。</p> <p>No.3 私たちは、一企業として、熱心に活動している「ひまわり」を支援してきている。福祉の論理だけに捉われずに、互いにととのメリットを探っていくことによって、市場価値が生み出されてくるだろう。</p> <p>No.4 この利用者たちを、将来何とか社会自立させていくためにも、ここの農業福祉の実践は意義があると思う。ここから、さらに巣立って、企業などにチャレンジできればいいと思う。</p> <p>No.5 これまでの福祉実践の固定的なあり方を変えていくためにも、新しい施設や作業所の実践のあり方を模索していく立場でもあるのではないだろうか。</p> <p>No.7 この作業所で、息子が短期間働かせてもらったおかげで、現在の企業就労がある。この子たちの最も悲しむべきことは、私たちのように、一度や二度、リストラされても、再度、チャレンジしていく機会がほとんどないということではないだろうか。</p> <p>No.8 地域住民ともつながりが増えてきたのは大きい。農作業に関するさまざまな知恵を何度もいただき、今の状態がある。まさしく、これが地域連携のあり方だと思うが…。</p> <p>No.9 最初は、「何をやっているのだろう」が率直な感想だった。「すぐにやめてしまおうだろう」などと思っていたが、空き農場を一から開墾して作物を育てていく姿勢に引きつけられたような気がする。</p> <p>No.10 これまでの作業所との“つきあい”が実を結んできたと考えている。私たちも、福祉や社会貢献に無関心なわけではなかった。この利用者や先生たちの努力が、逆に、私たちをささえてくれていたというか、知らず知らずのうちに巻き込まれたような（笑）そんな思いである。</p> <p>No.11 利用者さんたちが、地域に住んでいる知らないおじさんやおばさんから声をかけてもらう。また、いつの間にか、サポートして下さる人や事業所なども増えてきた。ここでの農作業活動が多くの支援者を生みだしてくれている。</p>
理論的メモ	福祉と労働の中間的な存在である作業所の取り組みが、地域や社会にさまざまな情報を発信しつつ、サポートの輪を広げている。これまでの福祉的就労の考えに一石を投じている姿が確認される。さまざまな実情をもった利用者を受け入れ、状況に応じて、個々の自己実現を目指すべく、次のステップに意欲的に進もうとする姿勢が、日々の活動の源泉となっている。人や環境、資源など、あらゆるものにささえられることにより活動が継続されていることが理解できる。

(4) 内容

ワークシートの構成は、概念名、定義、バリエーション（具体例）、理論的メモから構成されており、「アイデアメモ」「理論メモ」「その他」の項目を作成し、必要に応じて、現場の環境図や状況、作業ポジションなどを記載している。特に、「理論メモ」は、データとの距離

を取っていくことを意識し、理論産出の方向づけを促してくれる。そのために、記入の際には、記述レベルではなく、概念レベルで書くことを意識してきた。分析ワークシートの内容は、①概念名：最初は仮でもよい 既成の研究概念を借用するのは控える、②定義：解釈上のアイデアの活性化が必要であり、「～すること」「～であること」「～だと思うこと」など、動詞的に考えていく、③バリエーション：概念生成のもととなったデータを記入したり、データで着目した部分を抜き出して記入する、④理論的メモ：採用しなかった解釈例の主要なものを記録したり、解釈の思考プロセスをもっともよく記録したものが内容となる。また、概念とはならなかった他の解釈案や解釈の際に浮かんできた疑問、アイデアを記入しており、一方、解釈可能性のオープン化を目指し、対極例（対極例の検討は分析対象としたデータに対して、例外を発生させない分析）も述べていくことが含まれている。

（５）作成

フィールドノーツにおける逐語録や参与観察で得られた情報を何度も見直ししながら、分析ワークシートを順次作成していった。まず、逐語録の中で、研究テーマ、分析テーマに関わる部分に着目し、色を分けながら、マーカチェックを行った。そして取り上げたデータについての意味を検討しながら、各々のデータに適切と思われることばを仮の概念名として設定し、次に、その仮概念に定義づけを行いながら、最終的な概念を生成していった。

上記のように概念を生成しながら、ワークシートへの記入を順次行った。なお、生成した概念の有効性を検討するために、他のデータからも、この概念のバリエーションが見出せるかどうかを視野に入れながら、一つ一つのデータを吟味していった。バリエーションが見出せなかった時には、生成した概念は有効ではないと判断した。

また、研究者のデータ解釈の恣意性を最小限にしていくため、研究者自身の解釈の対極例を考え、そのような概念がデータから見出されるかどうかを意識して分析を進めていった。

分析ワークシートは、すべての概念ごとに作成していった。そして、ひとつのデータが終了したら、次のデータで同様のことを繰り返し行った。この分析ワークシートを利用することにより、解釈の基礎となったデータが容易に理解でき、これによって、データと概念との距離が一定に保たれる（木下、1999）。また、データを順次見ていくと、さらに新しい定義や概念が生み出されてくるが、一つの概念にいくつか例示が入ってくると、再度定義や概念名を検討していった。

（６）理論的サンプリング

ベース・データについて、一定のレベルで概念がまとまりつつある段階において、追加データを見出し、概念の精緻化を行いつつ、現実との適合性を検討した。この理論的サンプリングは、理論産出のために行う段階的戦略（Glaser&Strauss, 1967）であり、このプロセスを通じて、分析者はデータ収集と比較、分析を同時並行的に実施し、どのデータを次に収集すべきかを判断していくための根拠としている。

(7) 理論的メモ

概念生成の作業については、さまざまな解釈の可能性が出てくるので、分析ワークシートの最後に、それらを出来る限りメモすることを心がけた。このメモは、個別的解釈に加え、解釈したものの関係についてのアイデアでもあるため、研究結果をまとめていくための有益な仮説的指標となってくる。実際、分析を行っていく中では、さまざまな疑問点や発想が浮上してくる。また、重要なアイデアが突如として浮かんでくることもあるので、理論的メモの質量は分析結果を左右すると言われている。この理論的メモを取ることで、データとの距離が一定程度保たれ、理論産出のための手がかりとなった。ここでは、記述レベルではなく、概念レベルで記述していくことを念頭におきながら、分析過程、解釈、カテゴリー名、概要、カテゴリー間の関係、理論的比較、理論的サンプリングなどを随時記入していった。

(8) 理論的飽和の判断・根拠

追加データを収集し、類似例、対極例、機器録音時には得られなかった対話を増やし、分析を進めていくと、概念のバリエーションは豊かになっていくが、新しい概念が生成できなくなった時点をもって理論的飽和と判断した。M-GTAについては、研究テーマから分析テーマを絞るというプロセスがあり、それと同時に収集するデータの範囲も決まっていくわけで、このことは理論的飽和を判断していく上でも重視していった。

本研究では、分析過程全般にわたり、共同研究者と事象及びデータ編集等の確認を行ってきた。また、分析結果については、異なる理論的立場にある複数の実践者、研究者に参加してもらいながら、筆頭研究者の分析バイアスが研究に与える歪みを明確にし、最小限に抑制することが可能となる「研究者のトライアンギュレーション (Flick, 1995) を用いている。

5 結果と考察

長期のフィールドワークで得られた知見とフィールドノーツ、インタビュー記録などを総括したかたちで結果の提示と考察を行った。特に、福祉作業所における活動の意義と課題に関しては、「支援者の意識」「利用者の立場」「活動の価値」「社会参加」の4点を分析視点とした。

1) 概念の生成

分析は、インタビューを終えて逐語録が出来上がったのち、一番内容的に豊かであると判断したものから始めた。概念の生成は、M-GTA の概念生成方法に基づいて、データの解釈から直接生成していった。分析テーマに照らし合わせながら、それに関連深いと思われるデータを細かく見ていき、関連が薄いものについては、大胆なコーディングを繰り返しながら、最初は、データの全体像をカバーするようにした。関係が薄いと判断したデータの中にも、後に重要な関連性があることが判明したものもあり、それについては、判断した時点で再度、コーディングを行った。

そして、収集したデータから、重要と思われた部分にマーキングを行い、着目した部分や文脈全体を考慮しながら、データで語られていることの解釈を行った。そして、それらを

示す概念として、仮の概念名と定義を考えていった。また、概念の naming については、in-vivo コード（データで得られた生の言葉をそのまま概念化したもの）を使用し、「生き生きとした躍動感」が感じられる分析対象者の力動性や感情を重視した。

また、類似例を取り出しながら、並行して、対極例を探し、解釈の偏りを防いだ。研究者の都合のよいデータのみを取り出して分析するだけでは、真の概念を生成することができないため、現象の対極に位置するデータを緻密に検討し、最大幅を確定しようとしてきた。

2) サブ・カテゴリー、カテゴリーの生成

分析ワークシートに生成された概念が増えてくると、各概念間の関係性にも着目しなくてはならない。そして、その関係性の中から、サブ・カテゴリー、カテゴリーの生成を順次行っていた。こうして生成されたカテゴリー間の関係を研究者自身がはっきりと認識していくために、暫定図を何度か作成しながら、入れ替えたり、場合によっては、削ったり、付け加えたりの作業を繰り返し、結果図を整備していった。

3) 概念とカテゴリーの全容

生のデータから概念、サブ・カテゴリー、そしてカテゴリーに収束されるまでの流れや全容について Table 2～Table 4 に示す。

Table 2 データの概念化とデータ例

No	概念名	デ ー タ 例
1	せめぎあい	まだまだ不安定な作業所なので、これから先、どのようにやっていっていいかわからない時がある。制度の改正に伴う、作業所の形態変更による体制のしびりが活動に焦燥感をもたらしたこともあった。
2	ひきよせ	作業所とのつきあいが実を結んできたと考えている。私たちも、福祉や社会貢献に無関心なわけではなかった。ここの利用者や先生たちの努力が、私たちを“ひきよせ”たというか、知らず知らずのうちに巻き込まれたような（笑）そんな思いである。
3	親なき後	やっぱり、親がいなくなった後のことを考えると、今、何をすべきかを真剣に考えてしまう。きょうだいや親せきがどこまでサポートできるのかについても不安である。
4	柔軟性	少しずつ作業内容を増やしていかなくては…と思っているのだが、なかなか難しく私たち素人では無理な部分もあるが、たえず、創造性を働かせながら、新しいことに対して、柔軟に挑戦していかなくてはならない。
5	リミット	特別支援学校教員や親を中心としたサポート体制でいつまで継続してやることができるだろう。継続して支援してくれている先生方には感謝しているが、限界もある。
6	マンパワー	大規模な作業内容の場合、やはり、マンパワーの不足を感じる。今後、支援者やボランティア確保も意識しなくてはならない。
7	ささえ	地域住民や企業等のバックアップは欠かすことができない。そのためにも、この人たちを大切にしていかななくてはならない。
8	むきあい	台風や大雨による影響はやはり大きい。せっかく汗水流して育ててきた作物が一瞬でダメになるのがつらい。しかし、これと闘わなくては農業福祉の意味はないと思う。

9	おたがいさま	少しずつ、地域の企業などが支援の手を貸してくれるようになってきた。農業関連の支援者も協力してくれる。互いにとっての有益な道を考えてくれているようでありがたい。
10	タイアップ	丹精込めて育てた作物の加工受け入れや販売ルート促進に関するサポートは利用者の動機づけになっている。
11	労働条件	労働に見合うだけの給与支払いをしたいが、まだまだその段階には追いついていない。
12	不安定さ	季節によって労働や給与に不安定さが出てくるのは仕方がないのか…。
13	問題行動	利用者も、年齢を重ねるごとに、これまで目立たなかったさまざまな問題行動が出てくるようになってきた。場合によっては、作業にも支障が出てしまう。
14	体力	エイジングの問題は深刻である。今まで出来ていたことが急にできなくなることもしばしばである。病気がちになり、いったん休んでしまうと、元に戻すことが難しい。
15	余暇	余暇の過ごし方については、親が中心となって道筋をつけたり、経験枠を拡大していくことが大切である。休みの過ごし方は必ず、仕事に影響を与える。
16	関与	支援者や親によっても、活動に関する度合いが大きく異なっています。それぞれの家庭にも事情があるだろうが…。
17	認識のずれ	作業所の運営方針や活動内容、利用者への支援の方法などで互いに意見を交わしたり、議論する場が必要だと感じる。
18	親同士の関係性	残念ながら、親同士の関係で、作業所を辞めていく人たちもいる。ここに、福祉現場としての目に見えにくい課題が存在しているように思う。
19	信頼	作業所の活動を地域の住民に知ってもらい、理解してもらえるような手立てが必要である。深い理解からより強固な信頼関係へとつながるのでは…？
20	将来設計	子どもたちや親自身が何らかの明確な目標をもつことが重要であると感じる。
21	やりがい	毎日、何らかの課題や仕事があることに対する感謝ははかりしれない。
22	実践不安	日々の支援活動が、本当に“これでよし”なのか時々不安になることがある。

Table 3 概念からサブ・カテゴリーへの統合

サブ・カテゴリー	サブ・カテゴリーに含まれる概念
1. せめぎあい	(1) せめぎあい (3) 親なき後 (5) リミット
2. ひきよせ	(2) ひきよせ (6) マンパワー (7) ささえ (8) むきあい
3. タイアップ	(9) お互いさま (10) タイアップ
4. 折り合い	(11) 労働条件 (12) 不安定さ
5. バランス	(13) 問題行動 (14) 体力 (15) 余暇
6. ジレンマ	(22) 実践不安
7. 認識のずれ	(16) 関与 (17) 認識のずれ (18) 親同士の関係性
8. 設計図	(19) 信頼 (20) 将来設計
9. やりがい	(21) やりがい
10. 遊撃性	(4) 柔軟性

Table 4 生成されたカテゴリー

カテゴリー	サブ・カテゴリー	カテゴリーの定義
1. ひきよせ	1. せめぎあい	作業所のこれからの運営や維持などに関する焦燥感
	2. ひきよせ	困難な状況に対して逃げることなく手繰り寄せてくる力
2. つなぎ	3. タイアップ	支援の窓口を広げ、横のつながりを重視する
	7. 認識のずれ	親同士の声に出せない様々な思いの美妙なずれと修正
3. ゆらぎ	4. 折り合い	現段階でベターな選択は何かを絶えず意識する
	5. バランス	問題行動が日常生活に及ぼす影響の度合い
	6. ジレンマ	自らの日々の実践に対する不安と省察
4. シナリオ	10. 遊撃性	状況に応じて、自由に対応できる有利性
	8. 設計図	親や利用者にとっての明確な目標基準・将来設計
	9. やりがい	日々、目的意識をもって活動できる喜び

6 ストーリーラインと結果図

ここでは、Table 4で生成されたカテゴリー間の関係性について、考察を含めたストーリーラインとして記述していくとともに、併せて、その関係性に関する結果図（Figure 1）を表した。ストーリーラインは、研究結果をカテゴリーおよびサブ・カテゴリーを中心に簡潔にまとめあげていくことである。【 】はカテゴリー、〈 〉はサブ・カテゴリーを表している。

1) ストーリーライン

これまで、作業所の活動に関わってきた支援者は、障害者自立支援法（現障害者総合支援法）等の制度改正やそれに伴う運営の体制変更などにより、今まで取り組んできたことに関する活動の〈せめぎあい〉が生じてきたことに対する【ひきよせ】が生じてきている。設立当初は、チームリーダーを中心に柔軟に活動を進めていたものが、福祉施設の傘下に入ることによって、活動の規制や制約がかかってきたのである。もちろん、メリットも多くあるが、自由裁量ゆえの活動の幅が制限を受けることに対するしほりからの脱却として、様々な【ひきよせ】を行うことを通して、そこからの脱却を図っており、現状と今後の不安が入り混じった状態から、一歩踏み出そうとするパワーが存在していた。

また、現状を打開していくためには、これまで以上の作業確保と地域との〈タイアップ〉が求められるため、現在進行形の現実に戻されながら、様々な葛藤を抱えつつも、【つなぎ】を確かに行うことを忘れず、一歩ずつ前進していくという、前向きな活動に転化しようとしていた。農業福祉を通じて、地域や社会に還元、貢献できるものは何かを探り、人的・物的な環境資源を取り込みながら、作業所としての質的膨らみを実現している。

一方、生活と労働の関係は一体であり、どちらかのバランスが崩れてくると、たちまち、作業所の活動やメンバー間のチーム力が低下してくる。支援者は、さまざまな〈ジレンマ〉

と対峙しながらも、周囲と綿密に連携をとりながら、日々の利用者の状態を把握し、個々の実態や実状に応じて対応していくことで乗り切ってきている。

そして、支援者自身の自らの実践に対する懐疑の念とも対峙しながら、それを日々の活動によって払拭することを繰り返している。この双方における【ゆらぎ】への対処には、相応の力量や対応が迫られているが、これまでに、その〈バランス〉を最大限に保ちながら支援がなされていた。チームとして活動している中で、個々のメンバーが落ち込みを呈しはじめた時、支援者や仲間が互いに支え合って乗り越えるという力強さがあった。

また、労働条件についても、厳しいながらも、可能な限りワンランク上の状況を目指しつつ、現段階において、ベターな選択と〈折り合い〉を確認している。ここに、小規模作業所「ひまわり」の本質的なパワーが確認される。労働面だけに限らず、それを根底から支える日常生活面においても可能な限り関与しつつ、生活と労働のバランス調整を重視している。支援者たちは、利用者のわずかな変化をも見逃さず、たえず行動の背景要因を明らかにし、情報を共有しながらサポートしていることが理解できる。

最終的に、作業所は維持・継続されながら、常に、先を見通した【シナリオ】を携えて、日々の生きた活動に邁進しているのである。この【シナリオ】は、利用者や支援者の〈やりがい〉感と実状に応じて自由に活動できる柔軟性を帯びた〈遊撃性〉からもたらされるもので、作業所のよりよい姿をかたち作っていくために、必要に応じて推敲され、練り直された〈設計図〉として実践されているものでもある。福祉支援現場でよく確認されるような、パターン化され、固定化された計画ではなく、あくまで、その日、その時の状況に応じて、練り直されているのである。このシナリオ作りは、支援者や保護者、そして、活動の中心的存在である利用者の方々の意見も十分取り入れられて成り立っている。また、協力企業や地域住民等のアドバイスも最大限取り入れながらの活動となっているため、より、地域に根差した、密着型の作業所へと進出し、地域住民との信頼関係も根強くなっていることが確認された。

上記4カテゴリーの関連性については、行きつ戻りつしながらの修正が行われている。つまり、上位概念だと想定できる【シナリオ】が、その場、その時の状況によって書き換えられており、利用者の状態や作業所の運営等の状況変化によって、絶えず新しいものへと練り直されていることが確認された。利用者のシナリオと作業所のシナリオを融合させながら、さらに、支援者シナリオを挿入しつつトータルな【シナリオ】へと到達していると考えられた。

ストーリーラインの全体像やプロセスを検討した場合、支援者が経験してきた作業所での活動に関するさまざまな問題や課題を突破してきた経験知を、現在において直面している問題を打開していくためのエネルギーとして蓄積している。そして、将来の見通しや展望を捉えながら、それをプラス方向へ発揮し、常に、現在おかれた状況下で過去の実践を捉え直す作業が行われている。

最終的に、支援者たちが考えていることは、これまでの障害児者における農業福祉への参入をさらに柔軟に対応〈遊撃性〉させていくためにも、職業リハビリテーション等のシステ

ム枠内にとどまらない地域掘り起こし型の農のニーズに応じた新たな参入システムと地域農業活性化に向けた貢献のあり方について模索していることであった。そのためのひとつの手段として、ここで浮上してきた【シナリオ】づくりに着目していかななくてはならない。

2) 結果図

最終的に、4つのカテゴリー、10のサブ・カテゴリー及び22の概念を生成した。障害者の福祉や労働問題の現状を理解するための中心的なカテゴリーに集約されたものとして捉えている。

領域密着型の M-GTA に関する結果図作成は、ある程度概念ができ、流れやまとまりが感じられるようになってきた時点から行った。データから概念をすべて出し切ってから図を作成するのではなく、あくまで、概念生成と並行するかたちで取り組んできた。解釈したことはカテゴリーを用いて、出来る限り簡素な図で表すために、何度も修正を重ねた。また、図の表現や内容のバイアスを最小限にしたいため、作業所に関わっている支援者や保護者、企業関係者に結果図を示しながら、意見を求め、最終的な結果図として表した。

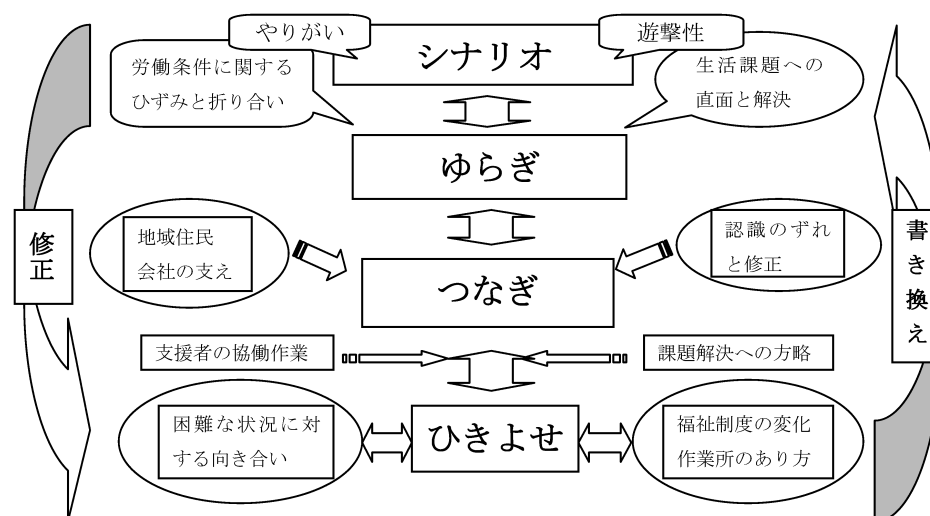


Figure 1 支援者の“活動の原動力” 領域密着型構造モデル

7 まとめ

本研究では、作業所における農業福祉の実践について、実際の現場と密に関わるフィールドワークを通して、小規模作業所の活動をサポートしている支援者の問題意識を浮上させ、“活動の原動力”について検討を行ってきた。ここで得ることのできた結果を基盤として、障害児者の農業福祉に関する今後の展望について大きな示唆を得ることができたように思われる。

今回は、利用者や保護者、学校、地域住民、企業関係者を含む支援者との関わりを通して

得られた生のデータに着目し、そこから、実践的問題意識と課題を明らかにすることにより、さらなる農業福祉の創造的実践が期待できるものとして取り組んできた。また、様々な立ち位置からのデータをあえて同じ土俵で検討することにより、それぞれの共通点と相違点を明らかにし、共通の問題意識を浮上させることができたとも考えている。

その中でも、農業福祉活動で生じる様々な“しぼり”を解いていくために、多くのサポートや有益な情報等を【ひきよせ】、利用者同士の仲間意識や協働価値はもちろんのこと、地域や事業所等をも巻き込んだ【つなぎ】へと展開し、支援者自身の「これで本当にいいのか」という省察を含めた問題意識による【ゆらぎ】との対峙を通して、利用者や作業所そして支援者自身の【シナリオ】を形成していくプロセスが確認された。これは決して時系列的な昇華とはいえないものの、常に、新しい【シナリオ】を練り直し、先を見通した農業福祉実践に繋がっていることが想定された。

質的調査を中心にしたアプローチにおける結果の普遍化に関しては、「現象を相互に関連づけ、包括的にまとめたイメージを示すとともに、そのイメージによって新たな知的活動を生成していく」（やまだ・山田，2009）ための領域密着型モデルを構築させることによって成立していると考えられ、本論における今後の実践的・理論的視座として、（１）福祉実践におけるフィールド調査のもつ意味、（２）支援者の“活動の原動力”モデルの精緻化、（３）農業福祉の展望と今後の課題を検証していかななくてはならない。とりわけ、実践的理論は現場に密着した活動から構成されるべき問題であり、そのためにも、本研究目的に適していると判断した M-GTA を用いた分析は有効であった。

今回の分析結果については、研究協力者である作業所の支援者にも提示し、ストーリーライン及び結果図についての確認やフィードバックを行い、各段階において、多大な示唆をいただきながら微調整を行ってきた。全体的に、支援者が納得できる心理構造プロセスを浮上させているものとして了承を得ることができ、本結果の妥当性が支持されたと言える。

データから分析概念を生成し、最終的にいくつかのカテゴリー間の関係を解釈的にまとめあげていくことにより、研究対象とした現象を説明する理論的基盤をつくることができた。よい概念とは、ある程度の抽象性を保ちつつ、具体例が想像できるような概念で、かつ、複数の具体例が説明できるものであり、さらに、データを蓄積して、より説得性のある実践理論を提示していかななくてはならない。今後、本研究の援用可能性を高めていくためにも、データに密着した解釈を行うことを徹底しつつ、その研究プロセスを明らかにしながら、現場の雰囲気を活かして生き生きとした現象を捉えていくつもりである。

8 今後の課題

本研究では、小規模作業所の維持・運営に関する支援者の思いの構造（活動の原動力）を明らかにすることを試みた。フィールドノーツやメモ等の記録、支援者への直接関与を通して、活動背景や活動の原動力について明らかにしてきた。一方、作業所継続に関する支援者

の葛藤についても対比して捉えることができた。今後も、継続的にフィールドワークを重ねながら、福祉作業所および農業福祉の発展に向けた、具体的実践の理解と促進を意識した提言を行っていきたいと考えている。

文献

- Flick, U. (1995) : 「Qualitative Forschung. Reinbek bei Hamburg, Germany : Rowohlt-Taschenbuch-Verlag. 小田博志・山本則子・春日常・宮路尚子訳 (1996) : 「質的研究入門」, 春秋社.
- 古井克憲 (2010) : 重度知的障害者地域生活支援の実践者と協働で行うアクションリサーチにおける研究者の役割, 社会問題研究, 59, 55-66.
- Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1967) : The Discovery of Grounded Theory Strategies Research, Aldin. 後藤 隆・大出春江・水野節夫訳 (1996) : 「データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか—」, 新曜社.
- 石田周一 (2005) : 「耕して育つ—挑戦する障害者の農園—」, コモンズ.
- 石山貴章 (2008) : 小規模作業所の設立と運営に関する研究 I—知的障害者を主とした小規模作業所「あさひのあたる家」の設立に関する研究—VISIO, No.36, 29-38.
- 木下康仁 (1999) : 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—」, 弘文堂.
- 木下康仁 (2003) : 「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—」, 弘文堂.
- 大澤史伸 (2010) : 「農業分野における知的障害者の雇用促進システムの構築と実践」, みらい.
- Strauss, A. & Corbin, J. (1990) : Basics of Qualitative Research Grounded Theory Procedures and Techniques, Sage Publications. 南裕子監訳 (1999) : 「質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順」, 医学書院.
- 宇川浩之・柳本佳寿枝・矢野川祥典・土居真一郎・前田和也・田中誠・石山貴章 (2007) : 農業福祉に関する一研究—小規模作業所の維持と継続—, 高知大学教育実践研究, 第21号, 25-31.
- 二宮厚美 (2005) : 「発達保障と教育・福祉労働—コミュニケーション労働の視点から—」, 全障研出版部.
- 三毛美予子 (2003) : 「生活再生にむけての支援と支援インフラ開発—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み—」, 相川書房.
- 村社 卓 (2005) : 「ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程の研究—知的障害者の就労支援における交互作用分析—」, 川島書店.
- 佐藤郁哉 (2002) : 「フィールドワークの技法」, 新曜社.

- 山崎順子・六波羅詩朗【編集】(2009)：「地域でささえる障害者の就労支援—事例をとお
してみる職業生活支援のプロセス—」, 中央法規.
- やまだようこ・山田千積 (2009)：対話的场所モデル—多様な場所と時間をむすぶクロノ
トポス・モデル, 質的心理学研究, No.8, 25-42.
- R・Emerson, R・Fretz, and, L・Shaw (1995)：Writing Ethnographic Fieldnotes. Chicago
：University of Chicago Press. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳 (1998)：「方法として
のフィールドノート—現地取材から物語作成まで—」, 新曜社.) 他

Establishment and operation of small-scale workshops (Ⅱ)

-Motivation for the activities of supporters in maintaining and operating workshops-

Motivation of people that have been supporting activities of small-scale workshops was analyzed using the Modified Ground Theory Approach (M-GTA) as a part of a continuing study. Results indicated the following four categories related to the consciousness structure that constituted the motivation for activities : **【drow】【connection】【fluctuation】** and **【scenarios】**. It is suggested that in the future, the working styles of people with disabilities mainly in the field of agricultural welfare should be examined through continuous field research.

Key words : small workplace, agricultural welfare, motivation for the activities,
market value, practice and clinical reports, modified ground theory approach